

「聖」にして「公」なる教会

(「コリニ・一二、一三」；「ペテ二・九」)

世は受験シーズン真つ盛りであるが、近年大学の学部の名前がどんどん長くなっている。以前なら文、法、農などの一文字が主流だったが、今では国際関係だの言語コミュニケーションだのと、とにかく長いのである。直接の因果関係はないが、教会の名前もハイカラで長いものが増えている。一寸調べただけでも「リバー・オブ・ブレッシング・チャーチ」とか「ファースト・ビンヤード・チャーチ」と言った具合にいろいろある。また〇〇チャペルと言う表記も目立つ。しかしチャペルというのは本来「礼拝堂」をさすものであり神学的な意味の「教会」を意味するのではない。教会とはキリストのもとに集められた信徒の集合であり、ゆえにそこが貸しビルの一角であろうとも、青空のもとであつても、主の名によって信徒が集められ、礼拝をし、礼典が正しく執行されておればそれは「教会」だ。教会総会を間近に控えた今朝、使徒信条の中にある「聖なる公同の教会」というフレーズを取り上げ、教会とは何かということについて理解を深めたい。

Ⅰ・聖なるⅡ「取り分けられた」共同体

まず注目したいのは「聖なる」ということばであるが、これは非常に誤解されやすいことばである。というのもキリスト者。非キリスト者の別なく、一般に「聖なる」ということばを聴くと倫理と道徳の側面からそのことばを捉えようとするのが普通の筋道だからである。しかし教会の歴史を見ていくと、「聖なる教会」と自らを称する共同体が「聖さ」とは遠いところにあつたことを示す事例はいくらでもある。それどころか「コリント」などを読めば、聖霊に満たされた初代教会においてさえ、分裂分派や異教礼拝、道徳的な腐敗などが蔓延していた状況を見る。だがそれでもパウロはこの教会に属するものを「聖徒たち」と呼ぶ。それはなぜか。簡単だ。その定義が違うのだ。ここでパウロが強調しているのは実際のキレイになつていふことよりも、主の「専用」になつていふこと概念である。言うなれば来客用の食器のようなもの。あるいはメルカリの〇〇さま専用つてやつである。ゲストを招くその日のためにのみ使われる皿は、普段使いのものと同じところには置かれなない。同じように「教会」は神の用途のためにこの世から選び分かれた(「聖い」)存在なのである。

Ⅱ・公同のⅡ「組み込まれた」共同体

英文の「公同の」ということばの英語はカトリック(Catholic)であるが、これは決してローマ・カトリック教会のみをさす言葉ではない。むしろこれは普遍的(Universal)という意味を考える方がよい。しかし教会史を学べば、教会には多くの分派があることがわかる。プロテスタントの中でも「聖公会」「メソジスト派」「ルター派」「バプテスト派」「ペンテコステ派」などさまざまな教派というものがあり、普遍性があるとはいいたい状況がある。しかしそれでも教会は「公同」のものだといわねばならない。ではその普遍に通じる道は何だろうか。それは父なる神の愛、救い主イエス・キリストの恵み、そして聖霊の豊かな交わり、即ち三位一体の神ご自身である。たとえるならそれはキャベツのようなものだ。葉の一枚一枚葉色も、形も、大きさもちがう。しかし一つの芯に連なつて層をなし、一つの玉を形成している。そのように教会は多様性を持ちつつもお「一つ」なのだ。

クリスチャンの中でよく聞くことばに「教会に一致がない」というのがある。確かにそのようなことはあるし、聖書も「一つ思いになる(ピリピ二・二)」ことを私たちに勧めている。しかし救いが

救われておりつつもなおその達成に努めるものであるのと同様、私たちが一つの聖霊によってキリスト・イエスに結び合わされたという霊的な現実を私たちは忘れてはならないのである。だから一致がないときに一致がないと嘆いてはいけない。むしろ私たちを一つにしてくださつた聖霊なる神の力を信じるのだ。そうするなら私たちの心はみ霊により、一致に向かつて動き出すのである。

* * *

あのケープタウン会議からもう七年が経過してしまつたが、二百力国から集まつた四千人の参加者とともに礼拝をしたことを私は忘れられない。そこには人種、文化、思想、神学的な強調点を越えたキリストにある一致が確かにあつた。これこそが教会の姿であり、この三位一体の神を私たちは掲げなければならぬ。自分の考えで神の計画を制限し「あれも違う、これも違う」といつて排他的、独善的になつては駄目だ。むしろ善にして聖なる神の計画に、御霊のさわやかな風がこの身をまかせて共に主に仕えていく。真の教会はそこにあるのだ。

「聖霊のさわやかな風が吹く所

それが教会だ(K・バルト)」